

柳田國男以前1

松岡國男の明治三十四年

明治三十三年七月、松岡國男は

東京帝国大学法科大学政治科を卒業し、農商務省農務局に勤務する。

同時に、本郷駒込富士前町の下宿に移り、大学院に籍を置き学業を続けるとともに、九月からは毎週

火曜日に早稲田大学で農政学を講

義するという生活を送るようになる。

その年の秋には、一年ほど前からあつた柳田家の養嗣子となる

話が決まり、牛込加賀町の柳田家へ往来するようになる。

翌三十四年正月には柳田家に居ることが多くなり、友人たちも國男に逢うために柳田家を訪ねている。この頃、

國男

國男と親交のあつた島崎藤村・田山花袋・國木田獨歩・蒲原有明・川上眉山らである。一月に青山美竹町に移転、

柳田

二月には一週間程群馬県西南部の前橋・桐生・伊勢崎あたりの製糸会社を官吏として最初の視察旅行する一方

で、三月の学士会の社会政策研究会に出席、四月には動物保護や産

業組合関係の研究のため大学に通

うというような生活を続けていた。

そして五月二十九日に柳田家の養嗣子として入籍した。養嗣子になるまでの経緯については詳細な研究がなされているので改めて触れないが、養父直平は信州飯田藩の出身、大審院判事。妻となる孝は当時十六歳だったので、実際の結婚は三年後の明治三十七年四月になるのだが、國男は入籍と同時に、青山から牛込加賀町の柳田家に移った。八月に信州小諸に島崎藤村を訪ね、十月から十一月、木曾以外の信州各郡下を約四十日にわたって産業組合・農会について講演旅行をしている。この旅行の間に、養家の故郷飯田に立ち寄り、墓参。「養父直平と似ているので、實子とみられ、それ以後あらためて柳田家の人となることを決意する」(『定本柳田國男集』別巻第五

「年譜」)ことになる。この旅が、國男にとって、運命的な旅であったことは容易に推測できる。

しかし、この明治三十四年十月から十一月の旅の途中で、國男が次の四首の短歌を詠んだことは意外に知られていない。

足引の山田の水うちとけてぬる夜すくなき旅にもあるかな

(「南信途上」)

たひ人のころもの袖をこと更に吹くにもたる夕あらしかな

水うみの夕の浪のおときけはいでゆの宿もさむくなりける

(「諏訪にて」)

遠近の山にすみやく夕けふり雲棚ひきて日はくれにけり

(「田中温泉即景」)

この短歌が収載されているのは明治三十四年十二月二十日発行の『伊那青年』(第二十三号)である。



柳田國男以前2

揺れる心を見つめる新資料

「柳田國男の全著作を、発表順・刊行順に配列した」書誌（『定本柳田國男集』別巻第五「書誌」）によって國男の関心を探れば、明治三十四年以前は『文学界』『國民の友』『帝國文学』あるいは友人回覧誌への新体詩や短歌などの発表がほとんどであるが、三十四年から「生産組合の性質に就いて」（『大日本農会報』）など、業務関連の論文が見られるようになる。

翌明治三十五年には農政学関係の論文が3本と、紀行随筆「伊勢の海」（『太陽』）・「栗の花」（『やまびこ』）が記載されているが、前記の四首の記載はない。

参加して結成された下伊那青年会

が編集、発行した機関誌」（後藤総一郎編『飯田・下伊那新聞雑誌発達史』「伊那青年」）である。地域の青年の新思想を求める動きが生み出した雑誌で、明治三十三年二月創刊、「明治三十五年十二月廢刊？」（前掲書）、編輯兼発行人は小林洋吉（29号以降、木下倭志雄）である。

この「雑録」の欄に、柳田國男の来映を告げる以下の記載がある。

「柳田法学士講話会 農商務属法学士柳田國男氏は本県農会の招聘に応じて県下各郡を巡回して産業組合に関する講話を行ひたりしが本郡へは去月二十九日来着翌三十日午後二時より飯田町繭市場会社に於て開会せらる斎藤謙吉氏開会を報し柳田氏は二時間余に亘りて熱心講話せらる来聴者百八十余名頗る盛会なりき」

新体詩人として中央でも多少は

知られた松岡（柳田）國男の来映を知って、文芸欄「文苑」のコーナーがあるこの雑誌編輯子の配慮だったに相違ないが、文芸の欄に「法学士」の肩書きで四首を載せた他に、前述の「雑報」欄の記述がある。

昭和四十六年から刊行になった『定本 柳田國男集』に、この短歌が収載されなかったのは、『伊那青年』が地方誌であり蒐集の枠から漏れていたことが推測できる。また仮に蒐集されていたとしても、柳田本人の許諾や校正を受けていたか疑義があるとされたのだろうか。前出の『飯田・下伊那新聞雑誌発達史』の「伊那青年」の項に、柳田國男が四首短歌を寄せたという記述はあるものの、その後、郷土誌『伊那』等にも、この短歌に触れた記述は見当たらない。

しかし、「本人の校正を受けた

かどうかは定かではないが、雑録」が記録するように、郷土に関わりの著名人士を迎えての講演会であれば字句や表記の多少の違いはあるにしても、柳田本人が詠んだであろうことは信じるに足るし、柳田國男二十七歳の時期、養嗣子を決意するデリケートな旅の途上で詠まれた短歌であったとすれば、柳田研究家諸氏の論議になってもいいのではないかと思えるのである。

「うちとけてぬる夜すくなき」
「たひ人のころもの袖をこと更に吹くにもにたる夕あらし」などは、養家柳田の故郷に向かう、養嗣子の心細さが、行間紙背に垣間見えると読むのは穿ち過ぎであろうか。

（二〇〇八・五・一四 小田嶋記）